

「夢の展示」について話そう！

—新しい“神奈川・共生展示室”を考えるためのワークショップ—

おおしま みつはる

大島 光春(学芸員)

展示更新ワーキンググループ

なぜ今ワークショップをおこなうのか？

2025年3月に神奈川県立生命の星・地球博物館(以下、当館)は開館30周年を迎えます。しかし部分的な更新を除くと、一度も展示更新を行っていません。これまで何度も計画しては挫折^{させつ}することを繰り返してきました。現在活動中の展示更新ワーキンググループ(※1以下、WG)は2018年度から活動をはじめて5年目を迎えました。昨年(2021年)度に展示構想をまとめる中で、特に神奈川展示室の新しい展示について「県民の皆さんと対話する機会をつくろう」という提案が持ち上がりました。そこで他館の更新プロセスなども参考にして、ワークショップ(※2以下、WS)を実施してみることにしました。当館の講座として対話型のWSを行なったことがほとんどないので、そのプログラム構成から議論を始めました。そして来館者は博物館の展示を「どう使うのか?」「何をしたいのか?」ということを考えながら4つのサブテーマを設定しました。

その結果できあがったのが次のようなプログラムです。時間は半日、回数は全部で4回、共通のメインタイトルは『新しい“神奈川・共生展示室”を考えるためのワークショップ』、サブタイトルは毎回変わって4つ、ファシリテータは各回2名(主担当と副担当)、参加者は最大15名。オブザーバーとして大島がすべての回に同席し、企画時のWGメンバーで、現在は名誉館員の広谷浩子氏にもご協力をいただきました。

基本となる進め方は図1のとおり。時間は10分休憩を入れて115分、約2時間の計画です。この進め方は、回を重ねるにつれてプログラムや問いの立て方について、ファシリテータの学芸員がアレンジするようになりました。

各回の成果は？

すべての発想やご意見を紹介することはできませんので、私にとって印象的だったものについて紹介します。こちらで紹介できないものについても記録を保存し、WGで共有しています。

4/29(金・祝) 第1回「何度でも見たい展示を考える」

担当：渡辺・石浜(学芸員)

最初のワーク「こんな展示があったらよいな」では、現状への不満も聴くことができました。展示の方針に関するご意見では、＜会話を誘う＞＜1階と3階のストーリーをつなげる＞＜社会との結びつきに関するもの＞などが挙げられ、展示そのものとしては、＜展示の見方を教示するもの＞＜大きくて迫力がありインパクトの強いもの＞＜学芸員の裏ストーリー解説＞などが挙げられました(図2)。

2回目のワーク「夢の展示」では、対話も積極的になり、最後の発表では踏み込んだ提案が多く見られました。＜もっと知りたい人のための踏み込んだ展示＞＜学芸員の研究や標本製作に関する展示＞＜神奈川の珍しいもの展示(3ヶ月更新)＞＜展示を「自分事」として見ることができる工夫＞＜神奈川県¹の自然と文化のつながり＞これらのうち神奈川の自然と深く関わりのある文化については、WGでも中心的なテーマにしようと考えています。

5/21(土) 第2回「友だち・パートナーと見たい展示を考える」

担当：西澤・折原(学芸員)

1回目のワーク「あったらよいな」では、＜体験を共有できる＞＜会話が生まれる＞＜自分と関わりがある＞のような参加あるいは没入しやすい展示を期待されているようでした。また＜くつろげる快適な空間＞や＜写真映える＞といった具体的な使い方を期待する声もありました。

2回目のワーク「夢の展示」でも、方針は最初とあまり変わらなかったようで＜探検・冒険(自分知の構築⇔学問の研究)＞＜自分と関係がある⇒自主的な学習のきっかけになる＞のような研究・探究系のストイックな展示を夢見る意見と＜1階の展示を見下ろしながらくつろげる空間(イラスト付)＞という、癒しを求める意見に分かれる結果となりました。2回の対話を経て、誰かの意見に引っ張られること

アイスブレイクとアンケート

趣旨説明

- このWSは展示テーマや展示項目を決定する場ではない
- 参加者の皆さんに展示を一緒に考えていただきたい

神奈川・共生展示室見学

展示空間の高さと広さを実感

ワーク：こんな展示があったらよいな

- 各回のサブタイトルについて、取り上げたい項目を各自書き出す
- 思いつく物をできるだけたくさん付せんに書いて貼る
- ファシリテータは付せんを分類し、掘り下げたり意見交換したり

収蔵庫見学

博物館の資料収集・保管機能を知る

ワーク「夢の展示」を表現し発表

- サブテーマごとに「夢の展示」を表現して発表・解説する
- 参加者の「夢の展示」を共有する

図1. ワークショップの基本的な進行。

なく、「初志貫徹」していることが印象に残りました。

6/11(土) 第3回「子供と見たい展示を考える」

担当：石浜・渡辺(学芸員)

1回目のワーク「あったらよいな」では、＜動作に反応するモノ(ボタン、レバー、ハンドルなど)＞＜カラフルでビジュアルかつ明暗のコントラストのあるモノ＞というご意見がありました。これらは2012～2014年度に「自然系博物館における『動く展示』・『動いて見る展示』の開発と新たな評価方法の試み」というタイトルで、私が代表者として取り組んだ研究課題と一致する内容で、深くうなずいてしまいました。他にも人気の書籍で展示にもなった『さんねんないきもの事典』の実物展示を見たいというご意見もありました。

2回目のワーク「夢の展示」では、対話の中で“流れ”や“つながり”といったテーマが語られたのか、＜展示の流れから学びにつながり、自分に関係するテーマで感覚と情報のバランスがとれた展示＞＜空、樹上、地中(水中)が同じ視線で見られる展示＞＜①標本迷路、②月替わり、③この子を探せ(標本と写真



図2. ワークショップの様子. 主体的に、積極的に参加していただきました。

で)、④標本になりきり(展示標本になりきって記念撮影)>などとても具体的な発表がありました(図3A)。なりきり展示や、昆虫愛も語られました。

私が惹かれたのは、<分類や地域で分けなくて、触覚、聴覚など感覚で分ける展示><学習コーナーと自由動線の楽しむ(2階建てジオラマを含む)展示>(図3B)のような意外な基準でエリア分けの提案があったことです。触覚はハンズオン展示ではもちろん用いられますし、聴覚は鳴き声などで使いますが、においの展示というのも過去に行いましたが、単品で扱うことは少ないので気になりました。また、自由動線で2階建てというジャングルジムのような展示もおもしろそうです。

7/25(月) 第4回「学習にしたい展示を考える」

担当: 折原・西澤(学芸員)

1回目のワークでは「学習に使える展示とは何か?」という問いが立てられました。<子どもや親子連れが楽しく学習できる><大人の学びにつながる><生涯学習の観点から博物館を「学びの場」として実感してもらえる><地質と生物が一目で総合的に分かる展示>などが挙げられた他に、<その場で質問に答えられる解説員>の配置や<展示解説ツアー>といった、人での対応が必要というご意見が複数寄せられました。

また次のワーク、「学習に使える展示を表現する」では、<海の生き物コーナーに水深を示す>(図4)<生きもの(昆虫・魚類の生態)展示>のような生物系の充実や、<ニュース、映画、音楽、アニメ、書籍の元ネタ紹介>や<地域の特産物売り場>のような観光と結びつ

けたご意見もありました。展示見学に<クイズ入りのワークシート>を使うというご提案も複数ありましたが、この形式自体は当館も学校でもすでに取り組んでいます。

予測していたこと、意外だったこと

参加者の皆様のご意見を伺って、私たちWGメンバーの予想を覆すようなものはありませんでした。このことはWGの方向性が、参加者の皆さんとずれていないことを確認できたという意味で自信になりました。感覚的に3分の1くらいは、常設展には無くても特別展や企画展では実施してきた内容や手法で、例えば「なりきり展示」や「昆虫の生態展示」です。もう3分の1くらいは、他館で取り入れているもので、その中には展示更新WGが考える新しい展示にも取り入れたいもの(例えば「文化と自然との関係」や「会話を生む」はテーマの異なるWSで複数回出ていました)が混じっています。最後の3分の1くらいは、当館では無理そうなもの(例えば、「解説員の常駐」や「展示解説ツアー」は約30年前の開館準備時の計画にはありました)といった感じです。

予想外だったことは参加者の皆さんが真剣に、しかも楽しみながらWSに参加してくださったことです。はじめは申込数が低調だったことから、「参加者の皆さんの姿勢(やる気?)まで低調だったらどうしよう」と真剣に心配していました。しかも、ファシリテータを務める学芸員も初めてかそれに近い経験しかありません。しかし、実際には参加者の皆さんの、熱のこもった対話や展示に関するこだわりのあるアイデアを聴くことができました。生き物(例えば昆虫やカメ)への偏愛(失礼!)に起因するこだわりの展示が欲しいとか、学芸員の研究や標本作製の仕事を展示して欲しいとか、ご期待を直接聞くことができました。

WSから私たちが学ぶべきは何?

私は教室の後方で観察したり、時折対話に加わったりした感触から、参加していただいた方の多くは展示更新についての対話や「発想を飛ばす」ことを楽しんでいただけたように感じています。博物



図3. A:「子どもと見た目展示を考える」の成果発表のすべて、B:「子どもと見た目展示を考える」の成果発表の1枚。遊びと学習を交互に行うアイデアのスケッチ。

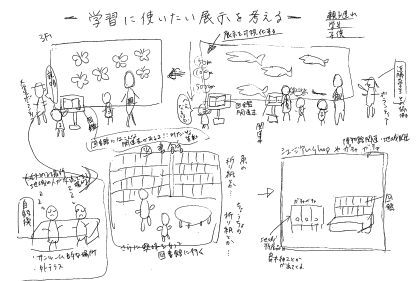


図4. 「学習にしたい展示を考える」の成果発表の1枚。ボランティア解説員や海棲生物生息水深を表示するなどアイデアが散りばめられたスケッチ。

館の講座のほとんどが知識・技術伝達型ですが、このWSは違います。参加して自分の考えや意見を述べ、参加者同士やファシリテータと対話を楽しみながら各自の成果を発表しなければなりません。来年度は展示更新WSを開催する予定はありませんが、またいつか「新しい展示」についてお話できることを楽しみにしています。

【企画時: 2021 展示更新WGメンバー】
石浜・大島・折原・西澤・広谷・松本・渡辺

【実施時: 2022 展示更新WGメンバー】
大島・折原・鈴木・西澤・渡辺

※1 ワーキンググループ(working group)
特定の問題解決や、計画を推進するための作業部会のこと。

※2 ワークショップ(workshop)
本来は作業場や工房を指しますが、ここでは参加者が主体となって意見交換や共同作業を行うような場という意味で使っています。